

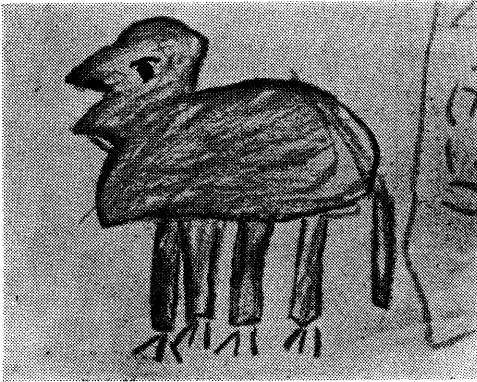
自然観察における 興味の重要性についての所感

山内美子

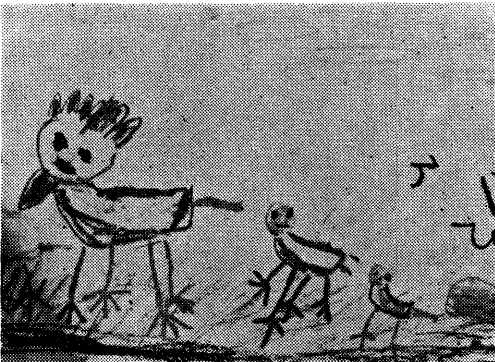
〈はじめに〉

自然観察教育の原理は『幼児の興味から出発し、その興味を触発しながら持続させるようにもっていくこと』ではないだろうか。興味こそは幼児の観察意欲を刺戟し、誘発するものと思われる。

幼児は直接に感覚器官を刺戟するもの、即ち目新しいもの、音がするもの、動くもの、匂いのするもの、美しいものにはすぐに興味を起し、即座に飛びついてくる。だがすぐに倦きたり、冷めたりしてその興味は長続きがしない。また観察は幼児中心の作業主義であって、保育者中心の説明主義になると、興味は長続きしない上に、忘却も早いのである。次に例を挙げながら、所感を述べたい。



第1図

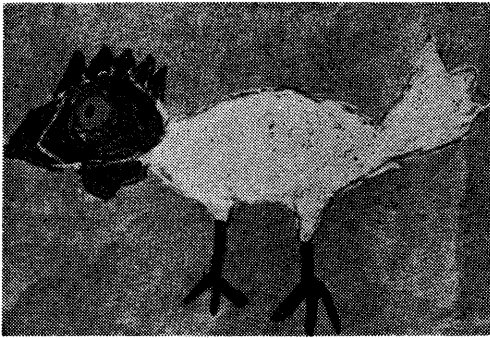


第2図

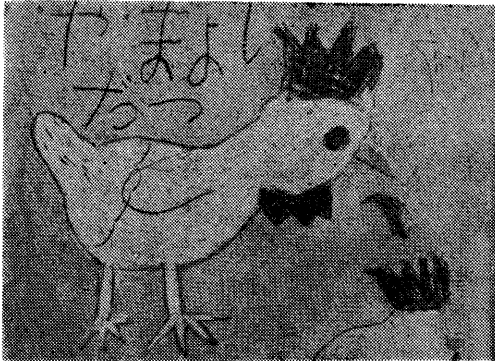
へ例Ⅰ ニワトリについて

ニワトリの観察をさせる前に、想像画を描かせると、第1図のよ
うな四本脚のニワトリが多く現われた。観察をさせる際には、
A夫「レグホンカ、知ツトル。見ンデモエエ」と全く興味を示さな
い。それでいて観察後の描画は、第2図のような四本脚である。狭

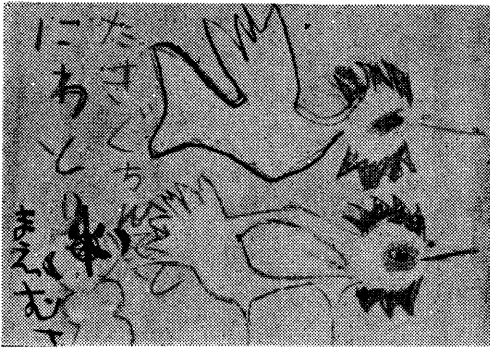
い鶏舎での観察は全見
とも、ツバサは第3図
のように観察画に表わ
れない。そこで庭へ放
して、餌をばらまく
と、4~5図のよう
に、ツバサの種々相が



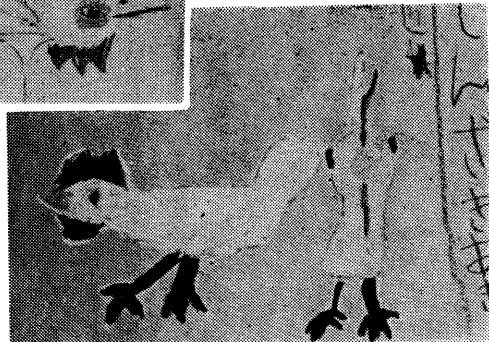
第3図



第4図



第5図



第6図

現われたり、第六図のような正面より描くという技巧も表現された。

B子「食ベル玉子ガ丸イカラ、にわとりモ丸イカト思ッタ。ダツテ、いぬヤねこハ親ト同ジノヲ産ムジャロウ」と、楕円形のみを描いていたのが、目前で産卵状態をみることによって、「コノ鳥ハ本当ニ食ベル玉子ヲ生ム鳥ダツタネ」と認識不足を修正すると同時に、成体に興味を示すようになった。

観察教育は「見せる教育」ではなく、「見ようとする意欲を起させる教育」と思われる。

〈例Ⅱ マイマイについて〉

マイマイ（カタツムリ）の観察をさせる際に、「皆さんの前の箱には穴がたくさんあいています、何が入っているのでしょうか？」

C夫「ワーッ!! 大キナでんでんむしダツ」

D子「どうがきノ葉ノ上ニ、でんでんむしガ一ツ、入ッテイマス」

E夫「ナーンジャイ。でんでん虫カ」

F夫「でんでん虫カ、嫌イジャ。ナゼツテ? 母チャンガ悪イ虫ジャートイッタモン」

箱の蓋を除いた時の幼児は十人十色の態度である。興味を抱かない者も、どうか第一回の観察は終え、描画も終えた。第二回目は

「またでんでん虫か」と反社会的態度をとろうとする。「今日はこのスホイドで微温湯をかけてみましよう」この観察には腕白小僧も眼を光らせた。シュッ、シュッと微温湯をかけると、触角をニョキッと出す。幼児達は自分の支配力に酔ったように興味は長く続く。

観察画は満足に成体を把握していない。第三回目は暗室にして、マイマイの光に対する趨光性を観察させたところ興味は長く続き、暗幕を明けると「チェッ、モウ止メルノ?」と残念そうである。観察画も文句一つ言わず一気に描きあげた。（詳細は保育学会で発表の予定）

『幼児の知識の窓は観察にある』といわれるが、興味を抱かない観察は、長時間費しても、上の空であり、心ここにあらずで、科学的な芽生えは望めない。興味こそ科学教育の扉をあける鍵ではないだろうか。

〈例Ⅲ セミ取り〉

G夫はセミ取りの名人で、園児から英雄視されている。毎日セミのたくさん入った虫籠をぶら下げて登園する。そしてセミの死骸を籠から出して所かまわず捨ててしまう。

園児達「先生、G君ガマタせみヲ捨テタヨ。オ墓ヲタテヨウ」ト
イッテモ「イヤダ」ッテイウヨ」

G君「グッテ先生、セミハ害虫ダカラ取ッテモエエが、とんぼハトッテハイケン」ト父チャンガイッタンダモン。……害虫ッテ悪イ虫ノコトダヨ、ネ先生。デモ僕、せみガドシテ悪イコトヲスルノカシランヨ」

……結局園児達に「セミはとつてもよいが、死ぬるまで籠の中へ入れておくのはかわいそうだから、夕方には必ず逃がしてやろう」と約束させた。ところが翌日

H子「先生、せみデモ、とんぼデモ研究ノタメナラトッテモイト、オ父チャンガイウタケド、ドツチガ本当？」

「研究って、お勉強のことですね。お勉強のためでしたら獲つてもよいのです。でも、いるだけとるのですよ。G君、セミの羽はなぜあるか知っていますか？」

「僕シラナイ」「僕モ」「私モ」

「それではG君、セミをとつて来て下さい」

翌日、園児一同がセミの観察をしたが、最もまじめで熱心だったのはG君であった。セミ取りの名人が、セミのことについて何も知らなかったのだから、異常なほど関心を示した。彼の観察態度を一同の前で褒めると、実に嬉しそうに微笑した。観察を終えた後、セミの墓をたてることを提案したのは、かつて反対したG君だった。「先生、研究ノタメニ死ンダセミノオ墓ヲタテ上ゲヨウネ」と。土を掘る時も彼は一生懸命である。夏休みが終えた或る日、ツクツ

クボーンが鳴き出した。

「G君、ツクツクボーンシね？」

「ウン、皆シナデ鳴クノヲ聞イタ方がイイネ？」

「G君はお利巧さんになったのね」友達からもその態度の良さを承認され、晴れ晴れとした表情でうなずいた。

観察教育は応々にして、美を破壊する。『道徳教育に反する』といわれるが、幼児の観察教育は、そんなに醜く、冷酷な教育ではない。むしろ生命の尊さを感じ、自然物・自然現象に対して驚異の眼をみはり、興味は次から次へと増大して、遂には人間味ある者に成長すると確信する。また観察教育は観察させる際のチャンスとか、レディネスも考慮に入れなければ、興味は抱かない。

例IV 興味の持続性について

筆者の幼児期の或る日、小学四年生になる姉が新しい教科書を買って帰った晩のこと、父が「この理科はたいへんおもしろい学科だよ」といいながら、一頁ずつくっているさまを見た私はたいへん感動した。「早く大キクナッテ理科が習イタイ」と思った。児童用の胴乱、毒壘、捕虫網を買ってもらい、母と山野・浜河へよく出かけた。帰宅して整理、図鑑での名前調べなど、親と共にする楽しさを感じ出す。父が出張すれば植物、鉱物、昆虫、貝類を土産として持

って帰ってくるのも楽しみであった。虚弱であった筆者は女学校進学は諦めていたが、クラス全員が入学願書を出すので、補習教育を全く受けないで受験した。ここでも興味本位に、動植物の観察・実験、物理・化学の実験はもちろんのこと、教官の手伝いに余暇を費いやした。女専進学も友人に刺戟され、メ切り日にクラス担任に、家政科へ行きたい旨申し出たところ、「なぜ家政科のようなどころへ行くのか」といわれたが、浪人をするのがいやで家政科へ進んだ。ここでは理科主任に感化されて、天体観測に興味を持ち、夜は天体物理の勉強をした。遂には自分の天体望遠鏡が欲しくなった。だが、小遣いでは到底買えないので、レンズ磨きからやることにした。苦心の結果、ようやく組み立てて、三日月に焦点を合わせた時の感懐は、旧制高等教員検定試験に合格した時・医博の学位記を受領した時よりも遙かに強烈であった。理学・教育学を系統立てて履修していない筆者が、観察教育面の研究するということは冒険であることはよく弁えているが、幼児期以来の興味を満足すべく、苦勞の連続で取っ組んでいる。明治の学制発布以来の理科の教科書（国定）も集めて喜んでいる状態である。

成人後も興味を失わないように育成された者は、人生に対して退屈を感じないのではないだろうか。保護者なり幼児教育に従事する者が、興味を抱き、その問題解決に突進する姿が、幼児の科学性を揺り動かすのではないかと思われる。逆に、幼児の発見や創造に、

保育者が共鳴共感を示さないのは、保育者自身が幼児と共に学ぼうとするまじめさ、真剣さが欠けているように思われる。保育者は幼児に教えるのではなく、幼児と共に自然を素直に学んでいる時、共に興味を感じている時などに初めて、幼児の発見・創造に心から共鳴共感できるのではないだろうか。このような態度が、再び幼児に反映し、幼児の興味を永続させるのではないかと思われる。

例V 女子短大生の理科に対する好意

家政科の学生一六七名に、小学校時代から高校時代までに、理科に対してどのような態度で臨んでいたか、調査をすると次表のようになる。小学校時代にはおもしろく感じていた者が、高校時代では「難しいから」嫌いになったといっている。また、小学校時代から「難しい」学科と感じたり、「親・兄姉が嫌っていたからその影響で嫌いになった」とか、「無味乾燥だから嫌いだ」という者、「蛙・虫類が嫌い」と恐怖感を抱いている者達が、将来母親なり、幼児教育者になった場合、よほど言語、動作に注意をしないと、影響力・模倣心の強い幼児に悪影響を及ぼすのではないかと恐れる。

要は保育者であるという権威とか、恐怖感・嫌悪感を捨てて、幼児と俱学俱進し、共鳴共感することである。そうすれば興味を感じない一部の幼児も好奇心・競争意識を触発されるから、観察意欲を

理科に対する好悪調査

	項 目	小学校時代	中学校時代	高等学校時代	平均
好 き な 理 由	おもしろいから	51.1 45	42.6 52	29.0 61	37.6 158
	実験があるから	20.4 18	20.4 25	20.4 43	20.4 86
	先生に好感を抱いていたから	10.2 9	18.9 23	20.4 43	17.8 75
	友人が好きだったから	1.1 1	1.6 2	0.9 2	1.2 5
	親の指導が良かったから	4.5 4	1.6 2	0.0 0	1.4 6
	必要を感じて勉強をしたから	1.1 1	7.4 9	25.8 54	15.3 64
	家に理科の本があるから	9.1 8	4.1 5	0.5 1	3.3 14
	そ の 他	2.4 2	3.4 4	2.9 6	2.9 12
	合 計	99.9 88	100.0 122	99.9 210	99.9 420
嫌 い な 理 由	難しいから	19.4 7	26.2 11	34.4 42	30.0 60
	器具の扱い方が面倒だから	2.8 1	2.4 1	4.9 6	4.0 8
	疲れるから	2.8 1	4.8 2	5.8 7	5.0 10
	実験道具がなかったから	25.0 9	9.5 4	0.8 1	7.0 14
	蛙, 虫が嫌いだから	8.3 3	9.5 4	4.1 5	6.0 12
	実験に失敗したから	5.6 2	0.0 0	1.6 2	2.0 4
	点が悪いから	16.7 6	21.4 9	20.5 25	20.0 40
	無味乾燥だから	8.3 3	14.3 6	20.5 25	17.0 34
	親・兄姉が嫌っていたから	2.8 1	0.0 0	0.0 0	0.5 1
そ の 他	8.3 3	11.9 5	7.4 9	8.5 17	
合 計	100.0 36	100.0 42	100.0 122	100.0 200	

出すようになる。

幼児の質問は、興味を感じた時にすることが多いが、その時には即答をさげ、幼児の能力に合ったようにヒントを与えながら、幼児自身の方で解決させるようにもっていききたい。この他、幼児の質問は、再確認したい時、成人に話相手になってもらいたい時（退屈している時、淋しい時）承認・愛情の欲求を満足したい時と思われるから、その時の心理状態に応じて善処しなければならないと思う。

自然観察後は幼児の興味・認識・把握状態を察知するために、観察画は描かせたいと思う。観察画はレポートに相当すると思うのである。



（広島女子短期大学）